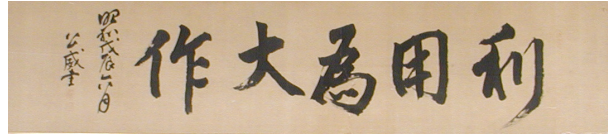


## ⑤ 工学界・工業界の重鎮・長老時代，万国工業会議（1907-1934）

西暦	和暦	歳	古市の足跡	国内および土木
1909	明治 42	55	06 帝国学士院第二部部长 08 東亜興業(株)社長	07.05 信濃川大河津分水起工式
1910	明治 43	56	10.18 臨時治水調査会委員	08.22 日韓併合
1911	明治 44	57	04.06 軌道鉄道改築準備委員会委員	03 淀川改良工事完成 横浜税関第一期海面埋立工事完成
1914	大正 3	60	06.23 日仏協会理事長	07.28 第1次世界大戦開戦
1915	大正 4	61	01.30 土木学会初代会長	02 「土木学会誌」創刊
1917	大正 6	63	06.23 工学会会長 10.12 (財)理化学研究所所長	07.31 朝鮮鉄道の経営を満鉄に委託 11.02 横浜税関第二期海面埋立工事・設備工事完成
1918	大正 7	64	01 工学会に連合工業調査委員会を設置	04.17 工政会発足 08.02 シベリア出兵 11.11 第1次世界大戦終結
1919	大正 8	65	08.15 道路会議議員 12.27 男爵位授与	04.04 都市計画法公布 04.11 道路法公布
1920	大正 9	66	08 東京地下鉄道(株)社長 12 学術研究会議会長	01.10 国際連盟発足，常任理事国になる 12.05 日本工人倶楽部発会
1921	大正 10	67	01.31 臨時治水調査会委員 09.13 度量衡及び工業品規格統一調査会委員	04.12 メートル法採用
1922	大正 11	68	08.31 工学会を組織変更し「日本工学会」と改称，初代理事長	03.26 隅田川口改良第三期工事着工 04.11 改正鉄道敷設法公布
1923	大正 12	69	10.18 帝都復興院評議会評議員	09.01 関東大震災
1924	大正 13	70	01.14 枢密顧問官	大井ダム竣工
1925	大正 14	71	11.14 震災予防評議会評議員	09.27 東京地下鉄(株)上野-浅草間着工 11.14 地震研究所設置を公布 12 芝浦水陸連絡設備工事(日の出埠頭)完成
1927	昭和 2	73	03.09 万国工業会議準備委員会開催，準備委員長 11.03 第1回日本工学会大会を開催	06.24 大河津自在堰陥没 12.30 東京地下鉄(株)上野-浅草間を開業
1928	昭和 3	74	01.28 万国工業会議評議員会開催，会長 08 日本動力協会会長	03 復興局の隅田川6大橋，すべて完成
1929	昭和 4	75	01.17 臨時電気事業調査会委員 10.29 万国工業会議会長として会議を東京に開催する 12 動力会議日本国内委員会委員長	03.31 大阪港第一次修築工事竣工 10.24 ニューヨークで株価暴落，世界恐慌が始まる
1930	昭和 5	76	02.11 ICE 名誉会員	10.01 特急・燕号，東京-神戸間9時間走行 10.04 淀川改修増補工事完成 10.15 利根川改修工事完成 11 小牧ダム竣工
1931	昭和 6	77	03 国際ダム会議日本国内委員会委員長	06.24 信濃川大河津分水完成 09.01 清水トンネル完成 09.18 満州事变勃発 11 東京港修築工事着工 12.01 「明治工業史」全10冊出版完了
1932	昭和 7	78	07.04 日仏会館理事長	05.15 犬飼首相ら暗殺 08.23 時局匡救議会議開会
1933	昭和 8	79		03.27 国際連盟脱退声明 05.18 アメリカ TVA 法可決 08.12 土木会議の設置
1934	昭和 9	79	01.28 永眠	12.01 鉄道省，丹那トンネルを開通(独)アウトバーン計画開始



●-1 朝倉文夫作 古市公威胸像(工学院大学蔵)



●-2 古市公威揮毫「利用為大作」(工学院大学蔵)

本會ノ會員ハ技師  
ナリ技手ニアラス將  
校ナリ兵卒ニアラス  
即指揮者ナリ故ニ第  
一ニ指揮者タルノ素  
養ナカルヘカラス而  
シテ工學所屬ノ各學  
科ヲ比較シ又各學科  
相互ノ關係ヲ考フル  
ニ指揮者ヲ指揮スル  
人即所謂將ニ將タル  
人ヲ要スル場合ハ土  
木ニ於テ最多シトス  
土木ハ概シテ他ノ學  
科ヲ利用ス故ニ土木  
ノ技師ハ他ノ専門ノ  
技師ヲ使用スル能力  
ヲ有セサルヘカラス

●-3 「土木学会第一回総会会長講演」から抜粋・翻刻(『土木学会誌』第1巻第1号, 1915年1月号)

古市は自分について「僕はどうも学者でもなし、  
実際家でもなし、技術家でもなし、行政家でもなし、  
何だか訳の分からない人間で、まあ鶴(ぬえ)

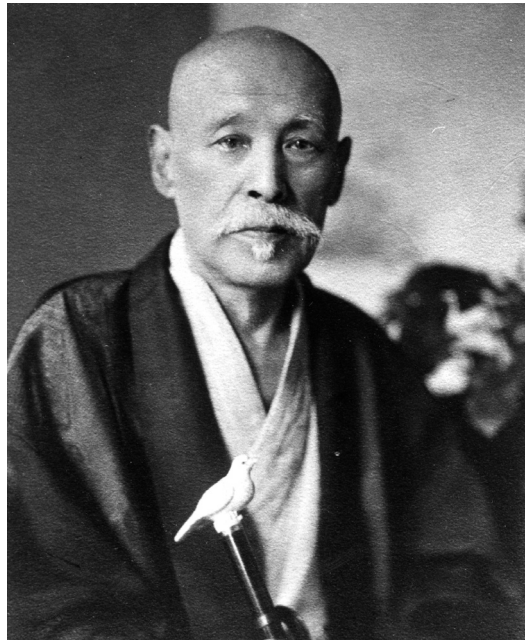
的人物とでも言うのだろう」と語っている。社会  
の要請に従い自在に変化し、求められる能力を發揮  
する、それが古市の本領であった。

1909年、帝国学士院第二部(理学およびその  
応用諸学科)の部長に当選すると13年間これ  
を務め、各界に働きかけて學術振興への理  
解を促し、資金調達と活動の拡充に努めた。

古市の究極の目的は理論科学を技術として  
社会へ応用する「Scientific Engineering」の  
確立にあった。工学会はこれに至る活動の場  
となる。1917年、会長に就任した古市は、各  
専門の学協会を総合した連合工業調査委員会  
を組織し、工業用材料および機械類の基準の  
策定、工学教育制度の改善、各種工業の発展策  
について提案している。また、1921年には度  
量衡のメートル法統一を建議し、度量衡及び  
工業品規格統一調査会委員としてメートル法  
成立に尽力、その後も工業品規格の調査にあ  
たった。

1920年、国際間の連絡を企図する学術会議  
が設置されると、欧米の科学状況に鑑みて諸  
科学の研究所の創設を建議、「地震研究所」「科  
学博物館」「航空研究所」等が設立された。

社団法人土木学会第一回総会が開催された  
のは1915年1月30日である。古市は初代会  
長として講演し、過度の専門分化により会員  
が専門のみに安住して、土木の総合性が失わ  
れることを強く戒めた。



●-4 晩年の古市公威